灰色の日常

灰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
灰色の日常

【Ｎコード】
Ｎ２４２５Ｇ

【作者名】
灰

【あらすじ】
平凡な毎日を送っている一人の少年「蒼野・空」１５歳。ある日この少年の通う中学に二人の転校生がやって来る。そしてこの転校生との出会いが――蒼野空の平穏だった日常を大きく揺るがす事となる――

第1話：日常

ここは、どこにでもあるようなごくごく普通の中学校。
唯一特徴があるとすれば、自然に囲まれている事。
都会の学校とは思えない、とても田舎っぽい風景の中学校であった。
そして、今現在夕方の４時３０分頃――
ちょうど今日の中学の授業が全て終わり、生徒たちは終学活を始めている最中であった。
「はぁ……やっと帰れるよ……。」
一人の生徒がため息をつきながら小さな声でつぶやいた。
この少年の名は『蒼乃空（あおのそら）』。
友人や親戚からは「ソラ」と呼ばれている。
髪の色は一般的な黒色。
髪形はショートカットより少し長め。
その表情からはどことなく優しげな雰囲気が漂っていた。
そして学習面においても運動面においても普通……。
とにかく普通の代名詞のような存在でもあった。
「ソラー……お前、最近勉強してる？」
ソラの一つ前の席にいる少年が、だるそうな声で問いかけた。
この少年は「久樹（ひさき）・優（ゆう）」。
髪型はソラよりも少し長め。
髪の色もソラと同じく一般的な黒色。
自称勉強嫌いだが、実際そんなに成績が悪いわけではない。
「うん、一応……というかさ、優、お前この時期勉強するの当たり前だよ？」
ソラがめんどくさそうに返事をする。
「へぇ……もう勉強始めてるんだ……。」
優は何故か不満そうな声でつぶやいた。
「もうって……後２ヵ月後には受験だぞ……。」

ソラが呆れたような口調で答えた。
「……そういえば……この学校に近々転校生が来るんだって？」
すると、優が急に話題を違う話にすり替えた。
「ん……あぁ……確か二人来るんだっけ？」
ソラは明らかにどうでもいいようだ。
「この時期に転校って……変な人じゃないといいけどね……。」
実際、転校生が来るという事は大して驚くような事ではないのだ。
「気の合う人だといいよな。」
そう言うと優も早々と帰りの仕度を再開した。
しかし、この転校生が来るという当たり前な出来事が――
ソラの平凡な日常を大きく揺るがす事になる――

第1話：日常（後書き）

未熟者の自分ですが、感想・コメントお待ちしています。

第2話：一通のメール

「転校生ね……。」
今現在夜の8時過ぎ。
ソラは一人、部屋に引きこもっていた。
「嫌な人じゃないといいけど。」
そう言うと、ソラはPCの電源を入れた。
「……明日も学校かぁ……。」
ソラにとって、学校はつまらない場所だった。
問題児から目をつけられないよう、自分の立場を作っておく。
いじめられなければそれでいい――
ソラはそんな気持ちで学校生活を送っていた。
心の底から信頼している友人も数少なく、クラスに3，4人程度だった。
「暇だし、ギターでも弾こうかな。」
ソラの趣味は作詞・作曲や、ギターの演奏など。
将来、バンドを組みたいとも思っているほどだ。
「何弾こうかな――。」
ソラがそう言いかけた瞬間――
ソラの携帯から、ほのぼのとしたゆるい楽曲が流れてきた。
「こんな時間にメール？誰だろ……。」
どうやらメールの受信音らしい、ソラはめんどくさそうに携帯を手に取った。
「……送信者が書いてない……迷惑メールか？」
ソラはそう言うと恐る恐るメールを開いた。
『あなたには、このメールが見えますか？』
そのメールにはそう書かれていた。
「何だこれ……？俺、誰かに恨み買うような事してたっけ？」
「気味悪いけど……一応とっとこ。」

ソラはそう言うと、わざわざ新しいフォルダを作りそのメールを追加した。
「明日優にでも相談してみよ。」
そう言うと、ソラは再びギターを手に取った。
この時ソラはまだ、誰かのただの悪戯だろうと思っていた。
この一通のメールが――
後々の出来事に大きく関わってくるとも知らずに――

第2話：一通のメール（後書き）

未熟者ではありますが、感想・コメント等お待ちしています。

第3話：転校生

次の日――
今は3時間目の授業の最中。
この時間にあの転校生の紹介がある。
「よし、それじゃあ早速転校生を紹介する。」
気の荒そうな男の声がクラス全体に響き渡った。
この人物は「田中（たなか）・修（おさむ）」。
ソラのクラスの担任であると同時に、理科の授業も担当している。
髪は若く見せたいのか、少し長めの黒色。
髪型も何か整髪量でもつけているような、チリチリとした髪質だった。
本人いわく「生まれつきの天然パーマ」らしい。
また、教師だというのに無類のゲーム好きでもあり、
そのせいか生徒からは「ゲーマー修」というあだ名がつけられていた。
「この二人だ。」
先生が廊下で名にやら合図をすると、クラスの中に二人の生徒が入ってきた。
「こちらが海音（あまね）・瑠衣（るい）。」
「そしてこちらが朧月（おぼろづき）・冷（れい）だ。」
先生が二人の名前を紹介した後、その二人から一言挨拶があった。
「はじめまして。海音・瑠衣です。これから宜しくお願いします。」
髪型はポニーテール。
口調はとても丁寧で、何となく上品な感じがする。
「朧月・冷です。これから宜しく。」
こちらは何となく冷静沈着な感じ。
髪型は校則違反になりかねないほど長く、目もほとんど髪で隠れていた。

「それではこれで、転校生の紹介を終わる。ちなみに二人の席は……。」
「海音は蒼野の隣、冷は優の前だ。」
何とそれぞれソラの隣に海音瑠衣、優の前の席に朧月冷が来た。
（よりによって隣かー……。）
ソラは心の中でつぶやいた。
「宜しく。」
朧月冷は何故か親しげな声で話しかけてきた。
「？……あぁ、宜しくね。」
（会った事……あったっけ？）
ソラは少し疑問に思いながらも適当な返事を返した。
まさかこの転校生との出会いが……。
ソラの人生を大きく変えるとは知らず――

第3話：転校生（後書き）

未熟者ではありますが、感想・コメント等お待ちしております。

第４話：不思議な感情

キーンコーンカーンコーン――
静かだった空間に、大きなチャイムの音が響き渡る。
「よし、今日の授業は終わりだ。もう帰りの仕度を始めてていいぞ。」
ソラのクラスの担任でもあり、理科の授業担当でもある田中修は大声で言った。
どうやらこれが最後の授業だったらしい。
「ん……もう終わりか……。」
ソラは眠たそうな声でそうつぶやくと、大きく背伸びをした。
「ずいぶん気持ちよさそうに寝てたね。」
突然冷がソラに声をかける。
「ん？……あ、あぁ……昨日ちょっと眠れなくて……。」
「何かあったの？」
ソラの返答を待ちわびていたかのように冷はすばやく問いかけた。
「？……いや、少し妙なメールが来てね……。」
「どんな？」
冷が興味津々な顔をしている。
「何か、このメールが見えますかとかそんな感じだった。」
ソラがそう言うと、冷がなるほどといった顔でうなずいた。
「？……何か心当たりでもあるの？」
ソラは冷の反応を見ると、少し気になったのかそう問いかけた。
「いや、別に。」
冷は静かな声でそう答えた。
「ソラー、今日暇ぁー？」
すると、突然前の方から優の声が聞こえてくる。
「暇だけどー……何か用事でもあるの？」
「いや、別にこれといった用事があるわけじゃないけど……暇だか

ら遊ぼうかなと。」
優がそう大声で言うと、ソラがとりあえずこっちに来て話そうと手招きをした。
「まぁ僕も暇だから別にいいけど……どこで何して遊ぶ？」
「あー……そうだな、じゃあ俺んちに４時集合は？これしようよ、これ。」
優はそう言うと、ギターを弾く素振りを見せた。
「そうだなー……久々に音合わせでもしよっか。」
ソラはそう言うと、少し考えてからＯＫと返事をした。
そしてちょうどその時、ソラの目に転校生、海音瑠衣の姿が映った。
（さっきからずっと座りっぱなしで……何してんだろ。）
ソラは少し不思議そうに海音瑠衣を見つめていた。
すると、突然海音瑠衣が立ち上がりこっちを振り向いた。
「あ……。」
ソラは思わず声をあげてしまった。
「あの……何かご用でも。」
海音瑠衣はおっとりとした口調で問いかける。
「あ……いや、何でもないです。ただちょっと考え事をしてて……。」
「そうですか……。」
そう言うと、海音瑠衣は平然と自分の席へ戻っていった。
「何だろう……あの人とは……自分と同じ感じがする。」
ソラは、小さな声でそうつぶやいた。
ソラには時々、何か人の感情を読み取る不思議な力があった。
この人はこんな性格だろうとか、この人とはこれから深く関わっていく事になるだろうとか。
そういう発想が突然頭によぎり、そのほとんどが実現しているのだ。
しかし、ソラ自身は自分に何か特別なものがあるとは思ったことは一度も無かった。
「ソラー、帰ろうぜ。」

優は帰りの仕度が終わったのか、既に教室から出ようとしている。
「あっ……ごめん、すぐ行く。」
そう言うと、ソラはいそいそと帰りの仕度を始めた。

第４話：不思議な感情（後書き）

まだまだ未熟者ではありますが、感想・評価等お待ちしています。

第5話：幼馴染

今は学校の帰り道――
ソラは制服のまま優の家で遊ぶ事になっていた。
「あ、でもギター取りに行かないと行かないんじゃ……。」
「いいよ、俺のギターかすから。」
優はソラの言葉を遮るように言った。
「うーん……まぁ、まだそんな上手いわけでもないし……それでいいか。」
「そんな事よりお前に少し頼みがあるんだ。」
優はそう言うと、何故かメモ帳を取り出す。
「ここにどういう曲にしてほしいか書いておいたから……。」
「作詞してくれって事？」
ソラは優の言葉を最後まで聞かないまま返答した。
「お願いっ！」
優が両手を合わせて深く一礼した。
「いやいやいや……別にそんな頭下げなくてもいいから。」
ソラは少し照れくさそうな顔をして言った。
「それはつまり……。」
「あぁ、僕でよければ全然いいよ。」
ソラがそう言うと、優が嬉しそうにメモ帳を渡す。
「ホント……いつもいつもありがとな。」
優の言うとおり、ソラはいつも優の曲作りのために詞を作っては渡していた。
「俺が作曲でお前が作詞……いや、ホントいいコンビだよな俺達。」
優はそう言うと、嬉しそうに鼻歌を歌い始めた。
そして――
「おじゃましまーす。」
ソラは大きな声で挨拶をすると、丁寧に靴を揃えてから部屋に入っ

た。
「あれ？親どっか出かけてんの？」
ソラは挨拶をしても誰の返事も無かったので気になった様子で問いかけた。
「うん、今夕食の材料買いに行ってるみたい。」
「じゃあ今のうちにギター弾こっか。」
ソラはそう言うと、肩に背負っていた学生かばんをおろした。
「じゃあギター二つ持ってくるから、ちょっと待ってて。」
優はそう言うと、自分の部屋に入っていった。
「そういえば……ここも全然変わってないよなー……。」
ソラは一人、小さな声でつぶやいた。
ソラと優は幼稚園からの幼馴染であり、小さな頃から毎日のように遊んでいた。
ギターをやりだしたのも優の親がやっていたのがきっかけだった。
「よし、んじゃ始めよーぜ。」
優は部屋から出てくると、ソラに少し汚れている方のギターを渡した。
「それ最近全く使って無かったから結構汚れてるけど……そこら辺は堪忍してくれ。」
「よいしょっ……いや、弾ければ全然構わないよ。」
そう言うとソラは少し重たそうにギターを受け取った。
そして――
それから約2時間、ソラと優は時々会話をしながらほとんど休む事なくギターを弾いていた。
そしてその時、鳴り止まない騒音の中、ソラの携帯には一通のメールが届いていた。

第5話：幼馴染（後書き）

まだまだ未熟者ですが、感想・コメント等お待ちしています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2425g/

灰色の日常

2010年10月16日10時11分発行